

学習・情報センターとして機能する学校図書館
—学習と資料を円滑に結び付ける工夫を通して—

知立市立知立南中学校 保田 大輔

1 はじめに

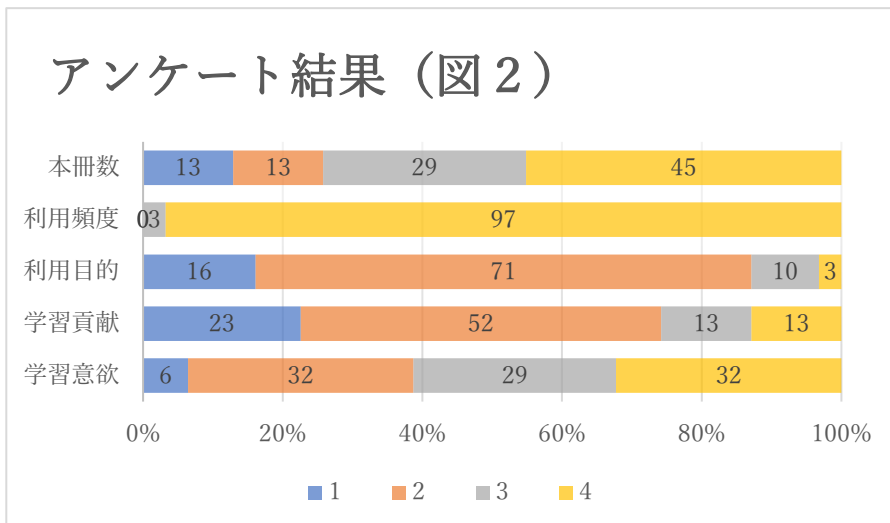
本校は、全校生徒531人、特別支援学級を含め、計19クラスの学校である。本校最大の特徴は、外国籍の生徒の多さである。全校で89人の外国籍の生徒がおり、全体の16.7%を占める。国籍はブラジルやフィリピンが多い。日本語の力が十分とは言えない生徒も多く、日本国籍の生徒も含め、図書室を積極的に利用しようとする姿はあまり見られない。

そこで、本学級(3年3組男子15名、女子16名)に学校図書館に関する意識調査を行った。アンケートの項目は図1の通りである。

アンケート結果を見ると、「普段本をよく読むか」(本冊数)という質問では50%以上の生徒が日常的に本を読んでいることが分かる(図2)。一方で、「図書室をよく利用するか」(利用頻度)という質問では、「ほとんど利用しない」と答えた生徒が97%であった。本校の図書室は昼休みの15分間開館している。しかし、清掃後すぐの時間であり、清掃の片付けなどで遅れてしまうと利用するのが難しい。加えて、昼休みは次の時

—アンケート項目— (図1)

- ① 普段本をよく読むか。(本冊数)
1 月5冊以上 2 月3冊程度 3 月1冊程度 4 ほとんど読まない
- ② 図書室をよく利用するか。(利用頻度)
1 週3回以上 2 週2回程度 1 週1回程度 4 ほとんど利用しない
- ③ 図書室の利用目的は何か。(利用目的)
1 読書 2 本を借りる 3 学習 4 その他
- ④ 図書室は学習に役立つと思うか。(学習貢献)
1 はい 2 どちらかといえばはい 3 どちらかといえばいいえ 4 いいえ
- ⑤ 図書室を使って学習をしたいと思うか。(学習意欲)
1 はい 2 どちらかといえばはい 3 どちらかといえばいいえ 4 いいえ



間の授業準備や移動も兼ねている。これらの要因から、図書室の利用者は少ないのであろう。読書はある程度しているものの、学校図書館の機能が発揮されているとは言い難い。また、「図書室の利用目的は何か」という質問では、「本を借りる」が74%で大多数を占めている。つまり、図書室は「学習センター」「情報センター」としての機能があるにも関わらず、生徒たちには「読書センター」としてしか認識されていないということである。

次に、「図書室は学習に役立つと思うか」(学習貢献)「図書室を使って学習したいと思うか」(学習意欲)

という2つの項目の結果について比較する。「はい」「どちらかといえばはい」を合わせた「図書室は学習に役立つ」と肯定的に考えている生徒は74%という結果に対し、「図書室を使って学習したい」と肯定的に考えている生徒は39%にとどまる。つまり、図書室は学習に役立つことは分かっているが、実際に学習したいとは思っていないということである。中学生になって図書室へ行って授業を行うことは少ない。国語、社会、英語等の教科で年に何回か行う程度である。そもそも図書室を利用してどのように学習すればよいのか分からないのではないだろうか。図書室を使って学習する場合は調べ学習が多い。本や辞書を使って何かを調べ、レポートや新聞にまとめる。調べ方やまとめ方に難しさを感じ、図書室を利用して学習することに抵抗がうまれていることも考えられる。図書室が学習・情報センターとして機能し、生徒たちが頭で役立つと分かるだけでなく、体で図書室を使って学習することのよさを体感できるようにする必要がある。図書室を使って学習する価値を実感することが重要なのである。図書室を学習・情報センターとして機能させることで、図書室で学ぶことの魅力を生徒が実感できるようにしていきたい。以上のことから、目指す生徒像を以下のように設定し、研究を進めることにした。

2 研究の構想

(1) 目指す生徒像

○図書室で楽しく学ぶ生徒

○何をどのように調べればよいか理解し、資料を活用する生徒

(2) 研究の仮説

学習・情報センターとして図書室を機能させ、魅力的な授業を展開することで、学習意欲を高め、図書室や資料を活用して学習することのよさを実感できるであろう。

*ここでの「魅力的な授業」とは、「楽しく学ぶことができるテーマ」、「何をどのように調べればよいかということが容易に分かる」、「調べたことをもとにスムーズにまとめることができる」を含む授業展開である。

(3) 手だて

【手だて1：魅力的な課題設定】

本単元では、松尾芭蕉の「おくのほそ道」を取り上げる。「おくのほそ道」は紀行文であり、芭蕉の「旅」を綴ったものである。そこで、本単元のテーマを「旅」と設定し、芭蕉の「旅」を読むだけでなく、実際に旅に出たつもりになって紀行文（「現代版おくのほそ道」）を書く課題を設定する。

【手だて2：図書室活用を組み込んだ単元構想】

本単元の展開では、「おくのほそ道」を中心に学習し、発展では、図書室で図書室の資料を活用して学習を行



【資料1 活用した図書資料】

う。図書室では、一人一冊資料を用意し、自分の好きな資料を選択できるようにする（資料1『週刊ユネスコ 世界遺産』 講談社）。

【手だて3：まとめをしやすくするための工夫】

展開の場面では、「おくのほそ道」の3つの構成要素を学習する。（「風景の描写・場所の情報」「心情」「俳句」）これらの視点を展開の段階から意識させることで、紀行文を書くというまとめの学習に生かせるようにする。発展の場面では、紀行文をスムーズに書くために、ワークシート（道草メモ）を用意する。資料から読み取ったことや読んで感じたことなどを付箋に書き込み、「道草メモ」に付箋を貼っていくことによって「現代版おくのほそ道」の構成を考えられるようにする。

3 研究の実際

（1）導入 旅について—紀行文「おくのほそ道」との出会い—

導入では、大型テレビに世界遺産の写真を提示し、ここはどこかというクイズを行った。

生徒たちは口々に知っている世界遺産の名前を出し、クイズを楽しんでいた（写真1）。クイズの後に、本単元のテーマを「旅」と設定し、日本にもかつて旅に生きた偉人がいると話をした。そこで、松尾芭蕉の紀行文「おくのほそ道」を読み、作者や成立時代、中学校3年間で初めて触れる紀行文というジャンルについて説明を行った。



【写真1 クイズに参加する生徒たち】

（2）展開1 芭蕉の「旅」とはどんなものだろう

ここでは、「おくのほそ道」の冒頭「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。…」の一説を読み、芭蕉の旅に対する価値観を、現代のものと比較した。本時では、「おくのほそ道」の冒頭を読み、3つの視点「旅人」「芭蕉の行動」「芭蕉の心情」で内容を分類した。生徒たちは、「漂泊の思ひやまらず」「心をくるはせ」といった芭蕉の心情から芭蕉が旅に依存している様子や、旅の準備をする芭蕉の行動から本当に旅が好きだという様子を読み取った。現代の旅と比べた生徒たちからは、芭蕉にとって旅とは「命」や「人生」であるという答えが返ってきた。今と昔の旅を比較し、芭蕉の旅に対する強い思いを理解することができた。

（3）展開2 芭蕉の「旅」を追おう

ここでは、「おくのほそ道」の「平泉」の章段を読み、芭蕉が実際にどのような旅をしたか追うことにした。板書では、平泉の地図を拡大して掲示し、芭蕉の通ったルートを一緒にたどれるようにした。大型テレビでは、奥州藤原氏の住居跡地や中尊寺金色堂など、芭蕉の目にしたものを写真で提示し、芭蕉がどんなものを見たかイメージしやすくなるようにした。本文の読み取りでは、発展で紀行文を書くことを踏まえ、3つの視点で芭蕉の「おくのほそ道」にどんなことが書かれているか読解を行った。3つの視点とは「風景の描写・場所の情報」「心情」「俳句」である。芭蕉の紀行文は、主にこの3つの視点で構成されている。ここで、これらの視点を意識して読むことで、実際に「現代版おくのほそ道」を書く発展の場面で生かせるようにした。

本時の導入では、視点を意識するために、修学旅行に行ったときの写真を提示した。写真の場所やそ

の時の気持ちを生徒たちに聞いた。場所の質問では、「三重県」「志摩スペイン村」「太陽のオブジェ」、気持ちの質問では、「楽しい」「早く遊びたい」などと答えた。こうして前者のような「風景の描写や場所の情報」、後者のような「心情」を意識して、本文を読むことにした。生徒たちは、芭蕉の旅の順に沿って視点ごとに読み取ったことをワークシートに書き込んでいった。読み取りを進めると、生徒たちは、かつての栄華を極めた藤原氏が住んでいた場所はなんの華やかさもない草原になったことや、平家討伐に貢献し歴史に名を残した源義経は高館という場所で仲間とともに討たれたことに気づいた。旅先で景色から思いを馳せ、涙している芭蕉の心情と、生徒たちの今の旅での心情はどう違うかと聞いた。生徒たちからは、「昔のことを想像しながら旅をしている」という意見が出た。ただ旅をして有名な場所を見るだけでなく、その歴史などを理解して旅に臨むよさを感じ取ることができた。

(4) 発展1 旅の目的地を決めよう

ここからは、これまでの学習を生かす発展的な場面である。ここでの目的は、自分の行きたい場所を決めること。まずは教室で、本時の目標「旅の目的地を決めよう」を確認した。その後、図書室に移動し、『世界遺産』という資料と出会った(写真2)。資料は、100冊近くあり、図書室のテーブルにあらかじめ配置しておいた。資料のサイズは教科書より大きい、薄い。各ページには世界遺産の美しく大きな写真がたくさん載っている。世界遺産やその歴史の説明もあるが、写真に比べ、文字数はかなり少なくなっている。

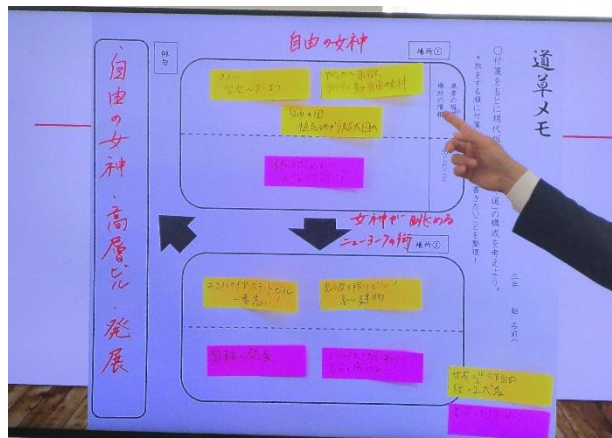


【写真2 資料に出会う生徒たち】

活字に抵抗をもつ生徒たちには、魅力的な資料である。ここで、しばらく時間をとってそれぞれが行きたいと思った世界遺産の一冊を選んだ。選ぶ際には、たくさんの資料があつて迷いながらも、楽しみながら選ぶ生徒の姿が見られた。ここでもう一度自分の選んだ一冊を読み、感想をノートに書く時間を設けた。学校の勉強では本当に旅に行くことはできないが、図書室ならではの方法で旅をしている感覚を味わうことができた。

(5) 発展2 「現代版おくのほそ道」に書きたいことを考えよう

ここからは、「現代版おくのほそ道」を書くための準備の時間である。ここからの授業は全て図書室で行った。まずは、生徒たちが書くための見通しをもつことができるよう、手順を視覚的に示した。手順は次の通りである。①資料に「風景の描写や場所の情報」「感じたこと(心情)」の2つの視点に分けて、2種類の色の付箋を貼り、書くための材料を集める。②2種類の付箋を「道草メモ」に貼り直し、俳句を考え、「現代版おくのほそ道」の構成を考える。③「道草メモ」を見ながら、「現代版おくのほそ道」を書く。大型テレビに『世界遺産』(自由の女神)の写真を映し、生徒がこれから行うのと同じように付箋の貼り方や道草メモの作り方を示した(写真3)。また、教師が作成した「現代版おくのほそ道」の文例も合わせて示し、これからどのように学習を進めていくのか分かるようにした。



【写真3 生徒に示した「道草メモ」】

説明を聞いたところで、生徒たちは資料を読み、視点に沿って考えたことを書き込んだ付箋を資料に貼

っていった。しかし、資料は教科書のように中学生に向けて書かれたものではないので、難しい語句など分からないことが出てきた。すると、生徒たちは「先生、辞書を使ってもいいですか」と質問し、辞書を手に取り調べ始めた（写真4）。また、教室では、普段前を向いて一人で教科書を読んだり、調べたりしているが、図書室では、4～5人で一つのテーブルを使用する。友達に相談しながら分からないことをともに調べ、解決し、資料を読み込むことができた。図書室には資料が整備されており、すぐに利用することができる。また、教室と比較すると、生徒間のコミュニケーションも円滑に行うことができる。図書室の資料や辞書を活用したり、友達と共同で問題を解決したりし、新しい知識を得る姿から、図書室が学習・情報センターとして機能し始めていることが分かる。



【写真4 友達と辞書を用いる生徒】

（6）発展3 「現代版おくのほそ道」の構成を考えよう

次は資料に貼った付箋を「道草メモ」に整理し、「現代版おくのほそ道」の構成を考える時間である。「道草メモ」は「場所①」「場所②」「俳句」で構成されている。「場所①・②」にはそれぞれ「風景や場所の情報」「感じたこと」の付箋を貼るスペースを設定した。前時で資料に貼った付箋を並べ替え、俳句を考えれば「現代版おくのほそ道」の構成が完成するようになっている。

生徒たちは、「現代版おくのほそ道」に書きたいことを考えながら、資料に貼った付箋を「道草メモ」に貼り直し始めた（写真5）。ヴェネツィアを旅先に選んだ生徒は、ヴェネツィア全体とサン・マルコ広場に分けて書きたいと考え、付箋を貼り始めた。「場所①」のヴェネツィア全体のことは資料の複数のページから付箋をかき集め、ヴェネツィアの水上市場に注目して整理した。「場所②」では、サン・マルコ広場でのカーニバルに焦点を当てて整理した。最後に、資料からカーニバルで賑わう中、風船が空を舞っている写真を見つけ、そこから想像して俳句を完成させた。



【写真5 付箋を並べ替える生徒】

（7）発展4 「現代版おくのほそ道」を書こう

本実践の最後に、「道草メモ」をもとに「現代版おくのほそ道」を書いた（参考資料）。生徒たちはみな、「道草メモ」を参考にしてスムーズに書き進めることができた（写真6）。「道草メモ」を十分に活用することで、しっかりとした構成の文章を短い時間で書くことができた。また、「風景の描写・場所の情報」から「心情」を述べ、「俳句」で締めるという構成は、これまでに学習した松尾芭蕉の「おくのほそ道」と同じ文章構成である。これまでの学習や図書室の機能を十分に生かした作品となった。



【写真6 「現代版おくのほそ道」を書く生徒】

資料2は、(6)の生徒の「現代版おくのほそ道」を書き終わったときの振り返りである。資料を読んで、新たな知識を得られたこと、付箋や「道草メモ」をうまく活用して紀行文をスムーズに書くことができたことが改めて書かれている。普通の授業では、まず目にかかることのない資料を使い、付箋やワークシートを活用しながら、楽しく書きたいことを考え、整理し、それをもとにスムーズにまとめることができたのではないだろうか。

景色だけで選んで、はじめは国名も知らなかったけど資料を読んで「ベネツィアはぼんぼりが船での移動だったり、車道がないことなど色々知ることができた。紀行文を書く時に付箋を使って細かくまとめたものを並べかえて文の構成を考えることで、何回もやり直してとても良い感じになりました。そのおかげで話がスムーズにまとまっていくので、本番書きにいったら、機会があれば文を書く時にやろうと思いました。

【資料2 生徒の振り返り】

		た	な	し	か	で	憩		と	す	と	段	防	り	で	遊	び	ハ	
	幕	°	い	た	る	も	い	サ	と	な	ん	は	も	エ	過	ぶ	エ	の	世
	を		行	人	カ	あ	の	ニ	も	ん	な	コ	ゴ	ネ	ゴ	に	ネ	島	界
	の		事	々	い	る	場	、	不	て	に	ニ	ハ	ツ	セ	も	ツ	を	で
	せ		に	で	ニ	°	で	マ	思	船	が	ド	集	イ	る	ト	イ	四	唯
	風		文	賑	バ	一	あ	ル	議	酔	°	う	め	ア	°	生	ア	百	一
	船		化	わ	ル	年	り	コ	だ	い	と	と	も	で	車	の	°	の	の
カ	飛		の	う	の	で	、	な	°	し	船	呼	郵	は	用	全	生	橋	水
一	ば		違	°	時	最	祭	場		な	の	ば	便	、	道	で	活	で	の
ニ	す		い	日	期	も	典	は		い	上	の	も	警	路	が	す	っ	都
バ			を	本	は	盛	の	庶		の	で	る	交	察	が	船	る	た	°
ル			感	に	何	り	舞	民		か	過	船	通	も	た	の	に	い	百
			じ	は	装	上	台	の		°	ゴ	だ	手	消	い	上	も	だ	十

【参考資料 実際の「現代版おくのほそ道」】

4 研究の成果 —事前・事後のアンケートの比較から—

図書室を使って学習をしたいか(学習意欲)、図書室は学習に役立つか(学習貢献)、どんな目的で図書室を利用したいか(利用目的)、の3点で本実践の事前事後の結果を比較する(図3)。図書室を使って学習したいかという項目では、意欲をもつ生徒が39%から94%に増え、55%増加した。図書室は学習に役立つかという項目では、肯定的な印象をもつ生徒が74%から97%に増え、23%増加した。どんな目的で図書室を利用したいかという項目では、学習という点に焦点を当てて比較する。図書室を学習という目的で利用したいと考える生徒は10%から26%に増え、16%増加した。結果を見るとどの項目

も増加傾向である。特に大きく変化したのは、図書室を使って学習したいという意欲の面である。

今回の授業で意欲の向上に関わった点について考えてみよう。まず、【手だて1：魅力的な課題設定】である。「旅」というテーマを設定し、先人の旅を学び、現代に生きる自分も旅をするという展開が学習への意欲を持続させた。実際に旅に出た気持ちになって紀行文をまとめることで、単元を通して楽しく学習をすることができた。次に、

【手だて2：図書室活用を組み込んだ単元構想】である。一人に一冊、テーマに沿った資料があった。その『世界遺産』という資料は写真が大きく、美しい。それに加えて一般的な活字の本に比べ文章量は少ない。生徒にとって魅力的で分かりやすい資料であった。また、図書室で授業を行ったことも要因の一つである。図書室で授業を行うことは珍しい。特に今回は授業展開の中の発展の時間すべてを図書室で行った。生徒たちにとっては新鮮であったであろう。生徒たちの最後の振り返りの中にも「図書室で資料を読むのは、意外と新鮮だった」「いつもと環境が違うので、授業に対するやる気が増えた」などの声があった。また、図書室は、1つの大きな机を4～5人で使用する。図書室は静かで学習に集中できる雰囲気であると同時に、友達の学習の様子を簡単に知ることができ、分からないことは教えてもらいやすい。加えて、辞書やその他の資料もあるため、容易に調べることができる。魅力的で分かりやすい資料と図書室の環境によって、紀行文を書くという作業が生徒たちにとって取り組みやすいものとなったと考えられる。旅に出て、紀行文を書くという明確な目標に向かってスムーズに学習を進められたことにより、生徒たちの図書室で学習したいという意欲が高まったのであろう。

本実践前の生徒たちにとって、図書室は学習に役立つが、実際に学習をしたいと思える場所ではなかった。しかし、今回のアンケートから、生徒たちにとって図書室は実際に役に立つし、学習したい場所であると考えが変容した。生徒たちの図書室での学習に対する思いは明らかに高まっている。図書室は学習・情報センターとして機能し、生徒たちは図書室の価値を肌で感じる言える。

5 今後の課題

今後必要になるのは、図書室を使った授業を継続的に実施することである。4の事後アンケートの結果を見ると、図書室の利用目的として「学習」と答える生徒は増えたものの、30%弱にとどまる。これは、図書室が学習センターとして生徒たちの中に定着していないということであろう。より主体的に、対話的に、深く学ぶためにも生徒たちが図書室を学習センターとして認識し、その機能が十分に発揮されるようにしなければならない。そのために、少なくとも学期に1回、年間2～3回は図書室の利用を単元に組み込んだ授業をする必要がある。さらに適切な資料を必要な分だけ用意することも大切だ。資料の準備には多大な労力がかかる。図書推進員や市の図書館とも連携を深め、準備にかかる負担を少しでも軽減なくてはならない。負担が多ければ、教員の足も図書室から遠のいてしまう。また本実践では、図書室にテレビやホワイトボードがないことから、他教室から借りることになった。ハード面でも整備を進めていく必要があるだろう。図書室の環境を整備し、国語科だけでなく他教科でも図書室を使った実践がなされるよう努力していきたい。

図3 事前・事後アンケート結果の比較

